



Title	想起の心的述語「覚えてる？」の記述的検討
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	間谷論集. 2019, 13, p. 91-112
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/89860">https://doi.org/10.18910/89860</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

## 想起の心的述語「覚えてる？」の記述的検討

千々岩 宏晃

〈キーワード〉 記憶 想起 心的述語 会話分析 記述用語

### 1. はじめに

本稿が対象とするデータは、たとえば以下のようなものである。003-004 行目で、Toy は Yum に「ナカヤマ」という人物について、「覚えてる？」という記憶にかかわる心的述語を用いた Yes-No 形式の疑問文を発している。これは、指示者が開始する認識探索 (the referrer-initiated recognition search; Sacks and Schegloff 1979) と呼ばれている。

断片 1. CallFriend japn6763 [あのねえナカヤマさんって覚えてるう?]

((Toy は日本に一時帰国して、アメリカに戻ってきた)) 00:26:00

→ 003 Toy: [あつ! .hhh あのねえナカヤマさん

→ 004 Toy: 覚えてるう?

005 Yum: う [う :: ん!

これら「覚えてる？」等を含む動詞は、しばしば「心的述語 (Mental Predicate)」と呼ばれてきた。「覚える」「忘れる」「思い出す」といったような記憶にかかわる心的述語は、特に「認識を要求している」「記憶を活性化している」というような広く心的・内的な認知的記述と結び付けられがちである。

しかし、「認識」や「想起」は行為や過程ではなく、「達成」を表す (Ryle 1949, Coulter 1999) と指摘されて久しい。しかし、では、これら記述は話し手が聞き手にどのような達成を表すことを要求していると記述できるのだろうか。

これら「心的・内的」ともとられかねない記述を検討するために、本稿では、特に想起にかかわる心的述語を含んだ表現「[人名] + (って) 覚えてる？」(以下「覚えてる?」)を取り上げ、心的記述を避けたうえで、どのような相互行為として局所的に記述可能なのかを検討する。

## 2. 先行研究

「[人名] + (って) 覚えてる？」という発話について行われてきた会話分析における研究は、前方の「名前」部分と、後方の「(って) 覚えてる？」部分において、それぞれ別の土俵で扱われてきたと言ってよい。

「名前」部分はいわゆる指示 (referring) の問題として研究されてきており、「(って) 覚えてる？」は、実践 (practice) の記述の問題として捉えられてきた。

本節でも、この2つの区別にしたがって、それぞれの先行研究を参照する。

### 2-1. 指示にかかわる研究

日本語における指示表現について、会話を記述的に研究したものは会話分析の分野において多々ある (Hayashi 2005, 串田 2008, 須賀 2018) が、本稿が対象とする形式的特徴に対して特に体系的に研究されたものに、串田 (2008) がある。

Sacks and Schegloff (1979) によれば、そもそも、ある指示を行う際に参与者について直近の課題となるのは、相手にどのような形で指示すれば進行性が妨げられることなく認識してもらえることができるか、であるという。

例えば、先の断片1の003行目でToyは「ナカヤマさんがね、」という風に話を突然切り出すという選択もあったが、突然「ナカヤマさん」といわれてもわからないかもしれないからまず相手に確認をしたほうがいいのか、というジレンマに陥っている、というわけである。

串田 (2008) は日本語の中でこの課題 (ジレンマ) がどのように扱われているかを記述し、「認識用指示試行 (eg. 江守徹?)」「認識要求 (eg. ミキちゃん知ってるやろ?)」「知識照会 (eg. そういえばヨゼフってわかります.)」の3つの実践 (practice) を例示している。

前述の「ナカヤマさん覚えてる?」、そして本稿で今後参照する断片はすべて

は「認識要求」の実践に類似している。「認識要求」は、「って知ってるよね？」等の統語リソースを用いることで、相手に提示し、「聞き手が指示対象を知っているという指示者の想定への確認を聞き手に求める」（串田 2008, p.100; 須賀 2018, p.56）実践を指している。

さらに串田(2008) は、この「認識要求」での「仕事」に3種が観察されたことを報告している。概略を説明すると、以下のように言うことができる。

- ① 本題行為 (main activity) のための前置き (pre-sequence; Schegloff 2007)。たとえば遠藤さんにかかわる「依頼」を聞き手に行う前に「遠藤さんって知ってるよね？」と聞き手に確認する実践。
- ② 本題行為の発話をどのようにデザインするかを定める予備的言及 (pre-mention; Schegloff 2007)。相手が「知らない」といった場合に、「遠藤さんって後輩がいてね」と発話のデザインを変えることが可能な予備の実践。
- ③ 認識できない可能性に気づいたり、認識できないことが顕在化した時の不十分さの解決。話しているときに理解齟齬が起こった際に、「遠藤さんって知ってるよね？その妹。」というように、相手の理解を助ける実践。

さて、串田(2008) の記述を「覚えてる？」に当てはめようとする際、以下の2点が疑問として起こるだろう。まず、(a) 当該発話は「聞き手が指示対象を知っているという指示者の想定への確認を聞き手に求めている」と記述できるか、という疑問。さらに、(b) 串田の提示した①、②、③のどの「仕事」に該当するのかという疑問である。

この2点の疑問は、本稿の目的である「覚えてる？」という発話の行為記述を行う際に、答えられなければならない問いであると言える。

## 2-2. 記憶の心的述語の行為記述の用語

「覚えてる？」を記述する際のもう一つの問題は、その実践をどのように記述すべきかという「記述用語」への議論が不十分である点だ。例えば須賀(2018, p.56-57) では、「認識要求」の実践に関してこのような記述をしている。

## (3-1) [CallHome Japanese 2209]

03 X1 → B: [尾] 賀さんって &gt; おらっしゃったくで [しょう.]

((中略))

3行目でBはAに「尾賀さん」という名前の人物のことを覚えているかどうか確認を求めている。

須賀 (2018, p.56-57) (データ前後を紙幅上省略)

確かにこの行為を【確認を求めている】と記述すること自体は、相互行為的記述として妥当であるように思われる。

一方、Ryle(1949=1987 p.402) は、「想起起こす (recall)」という語を「すでに習得しておりいまだに忘れていない」という「達成」を示す「達成動詞」なのであり、「認識行為ないし認識過程として、知覚することや推論することと同等に並ぶ」ようなものではないとしている。これを受けて、Coulter(1999, p.168) は「達成」を「思い出したことに誤りがないこと」と解説し、「旅行すること」に対する「到着すること」に類似しているという。さらに、この主張は他の人によって間主観性に基づいて承認されたり、拒否されたりするような公的な営みであるとも述べている。

とするならば、「覚えているかどうか」という部分は、より Ryle と Coulter を援用する形で記述するならば、「いまだに忘れていないと主張できるか」と記述し直す必要が生じる。

しかしそれを「覚えてる？」に適用する際に問題が生じる。もし適用すれば、それは「覚えてる？」ということがいまだに忘れていないかを主張できるかの確認を求めている」と記述することになる。しかしそれでは、単に「覚えている」と類義語である「忘れていない」に置き換えただけで、その【確認を求める】行為がどういった文脈とどういった意味合いで行われていることなのか、ということの精確な記述であるとは言えない。

また、同様の表現を扱った Smith et al. (2005) では、映画を見てそのストーリーの続きを見ていない人に説明するタスクで、以下のような記述がなされている。

(8)

B: *there's that lady remember that lady that he saw on the ship?*

(そこにあの女の人があって、彼が見た船にいた女の人、覚えてる?)

A: uh huh

…彼女(引用者注: B)は *remember* というメタ認知装置 (metacognitive device) も利用している。(中略) これらのデバイスは、まちがいをなく聞き手にこれらの記憶の活性化の補助を意図して用いられている。

Smith et al. (2005) p.1877 (強調等ママ、訳は引用者、前後を省略)

Smith et al. (2005) は、想起が公的であることを考慮せず、ここで動詞 *remember* に対して「記憶の活性化」という内的“過程”として記述している。そして、聞き手である A の発話について一切記述されていない。同様に、先の須賀(2018)も英語におけるこのような発話を「聞き手に記憶の中から指示対象を想起するように促すリマインダーの役割を果たす」と、「促すことが可能な認識行為」として記述している。

このように、ある発話を記憶の概念に基づいて記述しようとする際には、記述用語の検討が不十分であるか、内的記述にとどまって公的側面が考慮されなくなってしまうのである。

また、極端な例では、このような「想起」や「記憶を活性化」といったような認知的な言葉を、記述に利用することそのものへの批判もある。Potter(2006)が *Discourse Studies* 誌上で行った会話分析への批判では、Drew(2005)に会話分析を代表させながら、Drew の分析が認知主義的であるということを暗に批判している。

Potter は実践を記述するための語(自然言語)には限りがある、という。ゆえに、会話分析は、認知主義的な色を帯びる語の使用を制限するジレンマに陥っている、と述べている。会話分析はそのジレンマを言い換え(意図: intention → 指向: orientation 等)によって解消していると批判<sup>1</sup>している。

このように見ると、「記憶を活性化する」や「想起するように促す」といっ

た記述は、少なくとも「覚えてる？」の記述には不十分であるかもしれない。というのも、それが公的にどのような意味合いを持つのかということを記述しているかが判断できないのに加え、そもそも（少なくとも）会話上の研究では、このように「記憶」や「想起」をどのように記述するべきかについては、丁寧な議論が行われていないという背景もあるからだ。「記述」を研究の基本的手法に位置付ける会話分析において（串田・平本・林 2017, pp.16-17）、その用語についての選定に関する議論を設けることは必要であるだろう。

### 3. 研究方法と対象となるデータ

本節では、本稿で利用する研究方法と利用するデータを記す。

本研究を行う上で、実際のデータを用いずに議論を行うことは、本末転倒になる恐れがある。データを用いて記述を行うために、会話分析の手法が、十分な相互行為上の蓄積を有するように思われる。

しかし、先述の Drew (2005, p.161) も認めているように、会話分析の手法を用いる研究にも、認知的な要素を排斥した（しようと試みた）研究と、そうではない研究が混在していることは確かである。今回はすでに述べたように、会話分析の手法に従いながら、前者の立場に立ち、記述する語に制約を課してみたい。

データには、TalkBank コーパス内の電話会話である CallFriend (MacWhinney 2007) と、著者みずからが録音・録画したものを文字化（転記記号は付記に記載）し、利用した。データは全部で約 25 時間、本稿に関連する断片は 15 例あった。

本稿では、コーパスで得られたデータのみを断片として提示する。電話会話であるために、マルチモーダルな資源を参照できないという制約は存在するが、本稿の分析に反駁可能な余地を残すことを優先した。

### 4. 分析と考察

本節では、実際に「覚えてる？」のデータを参照しながら、行為記述を行う。

まず、結論としてどのような共通連鎖が抽出可能なのかを述べる。次に、実際のデータを見せながら、例証可能であることを述べる。

データを分析した結果、「覚えてる？」には串田の言う「認識要求」の実践の中でも、とくに①の「前置き連鎖」に類似したもの（話題可否確認）と、③「認識」が達成されないときの解決＝対処としてもちいられているもの（引き合い出し）の2種類があることがわかった。

#### 4-1. タイプI 話題可否確認用法

一つ目は、串田の言う「認識要求」の用法のうち、①の「前置き」に類似しながら、聞き手への話題の導入が可能であるという期待を指向しているものである。この用法では、ある人物（「名前」で指示された人）に関する情報価値を持った話題を始める際に、準備として、その話題＝「人名」の表現が、聞き手にとって導入・展開可能かどうかを尋ねる実践である。基本連鎖は以下のようになる。

##### 話題可否確認用法の基本連鎖

- 01 A：話題可否確認：「名前」＋（って）覚えてる？」（期待を含んだ発話）
  - 02 B：認識主張、または、証拠提示（導入可能）
  - 03 A：情報価値を持った「報告」の結末部分
  - 04 B：反応（「評価」「驚き」など）
  - 05 A：「報告」の続き
- まず、断片2を観察しよう。

断片2. CallFriend japn6763 [あっ！.hhh あのねえナカヤマさん覚えてるう？]  
 （（Toy は日本に一時帰国して、アメリカに戻ってきて Yum と電話している。一時帰国の際、寒すぎて風邪をひいてしまった。断片1の一部再掲）） 00:26:00

- 000 Toy: .hhh 友達に会うでもなくこんなかーゴホゴホいって  
 001 とても会えないって感じでえ、  
 002 Yum: °あっ！そうなん[d°  
 → 003 Toy: [あっ！.hhh あのねえナカヤマさん  
 → 004 覚えてるう？



- 005 Yum: ーう [ う … ん !  
 006 Toy: [ フミコナカヤマ.  
 007 Yum: うんうん.  
 008 Toy: .hhhh あの人ねえ,  
 009 Yum: うん.  
 010 (0.3)  
 011 Toy: 富山に帰ったよ.  
 012 (0.4)  
 013 Yum: あっ! なんかハワイかどっかで勉強してるとか  
 014 ゆってなかった [ たあ?  
 015 Toy: [ .hhhh それはやめてえ,  
 016 Yum: うん.  
 017 Toy: それはあ、それは最初の話しでそのハワイからねえ,  
 ((「ナカヤマさん」が博士号を取ったが就職難で就職できず、富山に帰らざるを得なくなったという末路が説明される。))

この断片の特徴は、まず、以下のように記述できる。

- ・ 003行目で「あっ!」という気づきを伴った活動（たとえば【報告】）の開始が起こるが、吸気による間と「あのねえ、」という発話の開始に出てくる別の表現の使用によって、「あ!」とは別の活動が行われる可能性が投射される。
- ・ 003行目で「ナカヤマさん」という最小限の指示が用いられている。ハワイにいたナカヤマさん、富山出身のナカヤマさん、などではない。また、相手の反応を待たず「フミコナカヤマ」と情報を追加している。
- ・ 008行目で「あの人」という指示がなされている（＝「文法的取り込み (grammatical anchoring, Hayashi 2005)」）ことから、その段階で指示対象が双方で一致したことが言語形式的にわかる。

さて、ターゲットである「覚えてる?」が含まれる 003-004 行目で行われていることには、いくつかの記述の可能性が考えられるだろう。ひとつは、串田

(2008) が述べるような「ナカヤマさん」に対する認識要求の実践のうちの①「前置き」であり、もうひとつは、「ナカヤマさん」という話題を導入、さらに展開することが「ナカヤマさん」という指示表現で可能か、という指示表現の可否を問う「話題可否確認」としての記述の方向性である。

ここで注目したいのは、011 行目の結論が語られた後の反応である。Toy はこの「富山に帰った」という【報告】(の結末)を、情動的価値のあるものとしてデザインしている。また、012 行目で反応を待っていることから、「富山に帰った」ということに、【評価】等の反応、たとえば「え！そうなの!？」といった驚きを求めているといえる。

しかし、Yum は 013-014 行目で行っていることは、ナカヤマさんの動向について昔の情報しか持ち合わせていないことを述べることであった。言い換えれば、ここで Yum は、012 行目で Toy の情動的価値に適切な反応ができなかったことへの理由説明を行っているといえるのである。

ここから明らかになるのは、Toy の Yum に対する「期待」である。Toy はこの後、ナカヤマが博士号を取ったにもかかわらず、富山の日本語学校で働かざるをえない就職難の現状を説明する。そこから、「あの優秀なナカヤマさんが富山なんかには帰った」こと自体が驚きであるという情報価値を含んでいたことが、Yum には 011 行目で理解する背景知識自体がなかったことがわかる。012 行目の沈黙は、Toy は Yum に期待していたにも関わらず、それが達成されなかったという齟齬が生じているまさにその沈黙である。

この Toy の期待の食い違いは、「覚えてる？」という形式が、話者が聞き手にある程度までの当該人物にまつわる知識を持っていることを規範的に期待して発話されていることを逆接的に意味する。言い換えれば 003-004 行目で Toy は、「覚えてる」と主張するからには規範的に持っているはずの知識を持ち合わせているか、つまり、私がこれから伝えるニュースに驚くことができるぐらい最低限は知っているか、という話題導入を行っているといえる<sup>2</sup>。そのため、この用法における「覚えてる？」は、串田(2008)の「認識要求」の①の実践に、さらに知識への期待が加わったものであり、驚くことができなかった際に遡及的にその期待が開示されるようなやり方であるといえる。

さらに、Wittgenstein(1953=2003, 2013) は、「期待する」は「満たす」とよく似ている動詞だと述べている (2013, p.253:445)。その意味では、「覚えてる？」は【反応する】ことを満たすことが可能かどうかを問うているのである。

仮に相手がその人物のことを全く知らないというような時、そのことは期待外であるだろう。その場合、「認識要求」が失敗した後に②「予備的言及」のように「ナカヤマさんっていう人がいてね」などと大きく軌道を変更するような手続きを行うことは、その情報価値を大きく下げることになってしまう。言い換えれば、「覚えてる？」という時には、認識が行われなかった場合に進行性を犠牲にして説明する、という選択がそもそも乏しい。その意味で串田(2008) が典型的に示した「依頼」のような、予備的言及にも軌道変更が可能な「準備」とは異なる性質を有している。

この進行性が犠牲にされた事例が、以下の断片3である。

断片3. [比較事例] CallFriend japn1684 [覚えてるう？]

((共通の知人の最近の動向を Mym が報告している。知人のダンサーが舞台に立つことになった。そのために「ちょっとだけ帰ってく」という。))

003 Mym: そうそれで - ちょっとだけ帰ってくんだけどお、

004 (0.3)

005 Mym: .hhh で ↑ジ ↑ ヨ ↑ ジがねえ？

006 (0.6)

007 Kyko: ジョージってだ [れ？]

→008 Mym: [覚えてるう？]

009 (0.3)

010 Mym: ダイアン<sup>1</sup>の友だちなんだけどお, .hhh ジョー [ジ-

011 Kyko: [あ]

012 Kyko: たし会ってないよジョージなんて、

013 Mym: # ああ :: # 会ってないかあ、

((4行省略))

018 Mym: あれえ？ (0.5) トッドともあつてな一あああつたよお、

019 Kyko: トッドは会ったよお？

((Kyko はジョージと会っていないといい、Mym は会う機会があったはずだと食い違った話になる。ジョージの話はこの後なされない。))

断片3では、005 行目で「で↑ジ↑ヨ↑ージがねえ？」と、導入の可否が確認されずに情報価値のある話題として導入される。しかし 006 行目の反応の不在、さらに「ジョージって誰？」という修復が開始され、Kyko がトラブルを抱えていることが明らかSにされる。ただし、その発話を聞くとほぼ同時に Mym「覚えてる？」を発話していることから、007 行目の「ジョージ」までの非選好の応答で反応を始めたと考えるのが妥当だろう。

その後、ジョージと会っていないことが明らかにされるが、さらに Mym は「ダイアン」「トッド」を導入し、「ダイアンの友だちであるから / トッドに会ったことがあるなら、ジョージにも会ったことがあるはずだ」と相手の経験を確かめると同時に、自分の経験との同定を試みている。

この事例から明らかになるのは、009 行目で Mym は「あああのジョージねえ」などと反応することを期待しているということである。この期待は後に裏切られるが、依然として、008 行目において Mym は単に“想起を要求している”わけではなく、「ジョージ」にまつわる価値のある情報をそのように聞ける立場か(=導入可能か)を、Mym がそれまでにやるべきだったこととしてやり足していると記述できるだろう。

さらに、一連の同定が失敗した後、「ジョージ」について当初語ろうとしていた行為の軌道は失われている。つまり、進行性を犠牲にしてジョージの話を続ける、という選択が参与者双方にとって無かったということを表している。

さて、断片2に齟齬が、断片3に不使用が起こっている例であるとすれば、典型例にはどのようなものがあるのか。以下がその事例である。

断片4. CallFriend japn6763 [それからあとお、ナカハタさんって覚えてる？]

((Yum が友人の住所を尋ねる。Toy は手紙で書いて送ると言う。)) 28m00s

010 Yum: [うん！今度お！うん！] [お願いしますう。]

- 011 Toy: [必ず書いて送るわあ。 うん! [それからあとお :::,  
 →012 Toy: ナカハタさんって覚えてるう?  
 013 (0.5)  
 014 Yum: ナカハタさん。 うんうん覚えて[るう。  
 015 Toy: [スチュワーデスだったあ。  
 016 Yum: うんうんうん。  
 017 Toy: あの人には会わなかったけどねえ,  
 018 Yum: うん。  
 019 Toy: 年賀状はきたわあ。  
 020 Yum: tch! ほんとにいい ::::!  
 021 Toy: あのねえ, (0.3) その前の年にねえ,  
 ((ナカハタさんが男の子を産んで母子ともに健康だ、という話がなされる。))

まず、断片2との共通点も含みながら、以下のことが記述できるだろう。

- ・ 011行目の「それからあとお」で、断片2に続く報告すべき「リスト」の一部分であることが示される。
- ・ 「ナカハタさん」という、断片2と同等の最小限の指示表現が用いられている。
- ・ 015行目で「スチュワーデスだった」と情報が追加されている。
- ・ 017行目で「あの人」という指示がなされていることから、その段階で指示対象が双方で一致したことが言語形式的にわかる。

本断片が断片2と異なるのは、020行目の【反応】が驚いたように聞こえることである。これは、019行目を情報価値のあるものとして反応していることを意味する。021行目の語りは020行目に触れない形で（例えば「ほんとなのよ」等ではない）行われている。言い換えれば、019行目に対して十分な【反応】が来ており、トラブルではないことが指向されているといえる。

また、Yumも、断片2のように自身が持つ限定的な情報を表示するようなことはしていない。その意味で、Toyの語りを聞くという協力しているといえる。

ただし、採収した断片の中で断片4のような協調的な反応が得られている事象

は多くない。あくまで話し手の期待は相互行為の組上にあげられるがゆえに、裏切られる可能性のある期待である。たとえば、断片5では、話し手の情報価値の投射が、聞き手がより知識を持っていたことによって裏切られそうになっている。

断片5. [比較事例] CallFriend japn6763 [マツモトさんって覚えてる？]

((前の断片のナカハタさんが男の子を生んで母子ともに健康だ、という話がなされる))

006 Yum: <そっかあ :::::[::.> 00h:28m:45s

→007 Toy: [あとマツモトさんって覚えてる？]

008 (1.0)

009 Yum: 男の人で英語が1級とか-英検1級とかっていう人？

010 Toy: あっ！1級だったんだそれはよく[知らないけどお、

011 Yum: [ううんうんうん。

012 Yum: [男の人でしょお？]

013 Toy: [あっほんと-

014 Toy: えっ！英検1級なんあの人の。

015 Yum: ううん。

016 (0.6)

017 Toy: あ知らなかったわあ ::.

018 Yum: uhuhu! ♫なんかあ、♫うんそういう風に聞いたあ。

019 Toy: はあ :::: そ- (0.4) その人今ねえ。

この断片で特徴的なのは、009行目で聞き手であるYumがToyを「マツモトが英検1級を持っていることを知る人」として【証拠提示】していることである。

ここにはひとつのジレンマがあると思われるかもしれない。それは聞き手の【証拠提示】によって話し手が知らない情報までを出してしまい、驚くべきニュースをすでに知っているかもしれないという可能性を表示してしまうことで

ある。

しかし、期待の反駁は相互行為においては期待が受け取られるのと同様に「想定内」であるように思われる。というのも、まず Toy は 010 行目で「それはよく知らない」というように言語形式的に「対比」を持ち出して、本来語ることが別にあることを表示する。それに協調する形で 012 行目で Yum も Toy が知らないと言った情報を排して「男の人」という事だけを確認するように発話を作り変えている。

さらに、実際に Toy は当初の軌道を 019 行目で続行している。このために、Yum の【証拠提示】に対して新規の情報 (014, 017) として受け取り、驚いて見せることによって、一つの挿入された話題として処理している。このような「期待の裏切り」を処理する手立ては多数あることが予測される。相互行為的に処理可能という意味では、やはり公的であるといえるだろう。

さて、ここまで考察した4つの断片は、多様な様相を示していたが、ひとつのパターンを伴った行為を行っていた。以下に、考察をまとめよう。

- ・「覚えてる?」は、串田(2008)のいう「認識要求」の仕事である①前置きとして用いられているが、それは典型的な「依頼」などの前置きではなく、話題が成立するかの可否を問う表現<sup>3</sup>である。
- ・「人名」部分は、最小指示を指向し、話題の導入が可能であると聞き手に期待することを表す。直後に情報を追加して対象を狭めることも可能である。
- ・その人物に関する情報価値を含んだ発話が後に来ることを投射している。
- ・後に来る話題(例えば最近の知人に関する近況)を知らないこと、ただしその人自身とそれ以前の情報は知っていることが、話し手によって期待されている。
- ・名前のみで導入されない場合、情報価値を与える発話を当初の軌道で行うことは困難な可能性がある(例えば知らない人物の近況に「驚く」ことは難しい)。

これらの点から、この「覚えてる?」が行っている行為は、2-1節で示した課題(a)の「指示対象を知っているという指示者の想定への確認を聞き手に求めている」という記述には収まりきらない性質を有しているといえるだろう。

## 4-2. タイプⅡ 引き合いに出す用法

本節では、前節と同じ形式を用いながら、連鎖上の位置が異なる「引き合い出し」の用法について分析・記述を行う。

引き合いに出す用法は、主に修復 (repair) の開始に来る要素であることから、串田 (2008) の「認識要求」の③「認識できないことが顕在化した時の不十分さの解決」と類似の行為であるといえる。この用法は、主に第三者 (にまつわる情報) が分からない等のトラブルへの対処に用いられる。

話し手は、[人名] を参照点として引き合いに出せば、聞き手が尋ねたことを聞き手は十分に理解するであろうと期待しており、その [人名] の表現が聞き手にとって導入-展開可能かを尋ねる実践であるといえる。

## 引き合いに出す用法の基本連鎖

- 01 B: 説明、確認等に対し知らない/理解がうまくいかないという問題  
 02 A: 引き合い出し: 「[人名] + (って) 覚えてる？」  
 03 B: 可能の主張  
 04 A: [人名] を引き合いに出して説明

まず、断片6を見てみよう。ここでは、コウイチさんという人が日本人会から帰国で抜けたあと、その場を仕切ることになったタイジさんが、Ast と Say に親しい共通の知人のユウコさんにその役割を押し付けたことが話されている。

## 断片6. CallFriend\_jpn6738 [コウイチさんって覚えてるう？]

((タイジさんがユウコさんに日本人会的なグループの代表を押し付けた話が Ast からなされ、一度話が終わりかける。しかし、Say はタイジを知らない。))

- 028 Ast: ふう :: [:: ん \_ 00h:07m:31s  
 029 Say: [タイジさあん？  
 030 Ast: ううん、って！ (0.3) タイジっていう、(0.2)  
 031 グリーンブライアンに住んでるんだと思うんだけどお、  
 032 Say: ああそうなんだあ ::.  
 033 Ast: ううん、



- 034 (0.3)
- 035 Say: [ ええその人ドン? ((ここでは「ボス」のような意味))
- 036 Ast: [ から -
- 037 (0.7)
- 038 Ast: ええ?
- 039 Say: その人ドンん?
- 040 (1.1)
- 041 Ast: なんかねえ,
- 042 Say: うう [ ん
- 043 Ast: [a-
- 044 (0.4)
- 045 Ast: ええっとお :: (0.5) コウイチさん覚えてるう?
- 046 (0.5)
- 047 Say: コウイチさん覚えてるよお.
- 048 (0.4)
- 049 Ast: コウイチさんのお ::, 後にい, そのタイジさんがあ,
- 050 そのお :: 日本人 - の会を仕切るみたいなあ,
- 051 .hhh ことになってたらしいんだけどお,
- 052 Say: ううん.
- 053 (0.5)
- 054 Ast: ん - (1.5) なんだかあ, なんていうのお何もしないでえ?
- 055 よっ - [ ユウコさんに押し付けたみたいな形に

029 行目でなされた「タイジさあん?」という質問は、タイジという人物を知らないことを表示し、説明に理解が追いつかない様子を示しつつ、同時に、説明を要求している。しかし、030-031 行目の解答では答えが得られていない。035 行目で「その人ドン?」というように、Say は 029 行目を Yes-No 質問に変換しやり直している。

045 行目は、その質問に答えるために、必要なコウイチさんを【引き合いに出

す】挿入連鎖を開始している。この「コウイチさん」を聞き手が利用可能な参照点として利用しようとしているわけである。

この発話には、以下のような特徴が観察される。

- ・ Astは「コウイチさん」という名前＋敬称という最小指示のみでその人物をわかるはずだ、と期待している。
- ・ 「覚えてる？」に対してYesで応答した（＝引き合いに出すのが可能だと主張した）Sayを「コウイチさん」周辺の情報をも導入可能である者として扱っている。049行目で「コウイチさんのあとにい」ということから、コウイチさんが日本人会を仕切っていたことを理解する者としてAstはSayを扱っている。
- ・ 4－1で見た断片群が新しい話題を導入する「準備」であったのに対し、この断片では「タイジさんが分からない」ということ、「他の人を参照しなければ説明が難しい冗長になる等」への「対処」として用いられている。

次に、同様の事例である断片7を分析する。断片6が挿入連鎖であったのに対し、こちらはいったん連鎖が閉じかけたものを、「＝」で示された音声の接続によって再度開きなおしている。

#### 断片7. CallFriend japn6484 [カメノさんって覚えてる？]

((共通の知人のタマダ君の家が話題になっている。Rglはタマダ君の家が自分の家の近くだと思っていた。しかし、それが誤解だったことがわかる。その直後。))

- |     |      |                      |       |
|-----|------|----------------------|-------|
| 000 | Rgl: | 私だからあ、hhh すごい近くだと思って | 28:00 |
| 001 |      | たんだよ。                |       |
| 002 |      | (0.6)                |       |
| 003 | Lbo: | へえ ::::: _           |       |
| 004 |      | (0.9)                |       |
| 005 | Rgl: | はあ :::: ん _          |       |
| 006 |      | (1.3)                |       |
| 007 | Rgl: | 知らなかった。              |       |

- 008 Lbo: °ふう :: ん \_°= カメノさんって覚えてる？  
 009 Rgl: うん.  
 010 (0.6)  
 011 Lbo: 彼女の隣の家だよ.  
 012 (1.7)  
 013 Rgl: 家があ？  
 014 Lbo: ううん.  
 015 Rgl: へえ ↑ : ↑ : ↑ : ↑ : ↑ : \_

連鎖上の位置の違いはすでに述べた通りだが、000行目以前に生じていた誤解に対して利用可能な参照点を008行目で話題が変わる前に示すことで、補足をし、Sayの理解をより確実なものとしようと「対処」している。013行目で修復が開始されているものの、015行目でRglは参照点によって新たに産出された情報＝タマダ君の家がカメノさんの家の隣であること、を誤解に対しての情報価値のあるものとして受け取っている。

以上、2つの断片で、聞き手の話の知識不足への「対処」として用いられており、相手のある範囲の知識を想定して産出された参照点であることを記述した。

## 5. 総括

本稿では、「[人名] + (って) 覚えてる？」を、心的記述を避けたうえで、どのような相互行為として局所的に記述可能なのかを検討した。各断片を分析し、2つの用法があることを記述した。結果、二つのタイプを記述することができた。

用法の1つ目は、「前置き」として用いられるものであり、指示者が「名前と敬称のみ」の最小指示をまずは行い、その人に関して価値ある情報を持つことを投射し、その人が話題として導入－展開可能かを尋ねていた。その際に、その価値ある情報自体は持っておらず、しかし【反応】に最低限必要な背景知識を持つことが、聞き手によって期待されていた。

用法の2つ目は、トラブルに対する「対処」として用いられるものであり、あ

る人を引き合いに出すことによって解決が可能であるが、その人を導入できるかどうかを相手に尋ねるものであった。こちら「名前と敬称のみ」で行われ、その人の周辺の情報も同時に導入可能かを指向する実践となっていた。

この2つのタイプは、それぞれ串田(2008)の記述と大枠で一致しながらも、相手に何を期待していたかが発話時には曖昧で、しかし発話者に帰属される指向がその後の発話からわかるようなものであった。その意味で、広く「認識(cf. 早野 2018)」を表すものであるかもしれない。

しかし同時に、「覚えてる？」における相互行為を記述する際に、話者の内的な記述は排することも可能であることを明らかにした。また、内的と思われるような「期待」においては、断片から例証が可能であるために、参与者にとっては公的であるといえる。

さらに、例えばタイプⅠであれば「相手の認識を要求する」というよりも、これから知人の噂話を行おうとする人達にとってはむしろ、その人を話題として提供できるかどうかというところをより指向しているように思われる。さらにタイプⅡでは、人物そのものの認識ではなく、その人物を含めたことを導入可能＝「覚えてい」なければならない。その意味で、「覚えてる？」に対し、「記憶を活性化する」や「認識する」という内的にとらえられる危険性のある記述は、しばしば行っている行為に対して社会的側面の記述を弱化させる、ミスリーディングな表現でありうると考えられる。

ただし、今回は「覚えてる？」という1表現のみの探究になってしまった。また、電話会話におけるコーパスデータしか示すことができなかった。期待や理解を示す資源として、視線等のマルチモーダルな要素が関わる可能性は十分に残されている。今後の課題としたい。

## 注

- 1 ただし、Potter はこのことを好評価しているように書いている。しかし、全体の論旨や、前年にかけて行われた Human Studies 誌での Coulter と言説心理学間での論争 (Coulter 1999, 2004, 2005, Potter and Edwards 2003) を加味するのであれば、Potter が会話分析における心的現象の排除 - 迎合の二重基準を批判していると考えられる。
- 2 ただし、「当のニュースを知っているのは困る」という側面もある。つまり、もうすでにそのニュースを知っているなら、この「驚いたニュースを伝える」という活動が台無しになる可能性がある。その意味で、この場所で聞き手は最近その人に関わった驚いたニュースを出して、話し手を先取りすることもできる。
- 3 例えばつい先ほどまで話していた人物 X に関して「X さんって覚えてる？」と聞くのは不自然だろう。それは、導入の可否の検討が余剰であるからに他ならない。

## 参考文献

## &lt;英文&gt;

- Coulter, Jeff (1999) "Discourse and Mind". Human Studies (22): pp. 163-81.
- Coulter, Jeff (2004) "What is "Discursive Psychology". Human Studies 27(3): pp.335-40.
- Coulter, Jeff (2005) "Language without Mind". In. H. te Molder and J. Potter (eds.). Conversation and Cognition. pp.79-92
- Drew, Paul (2005) "Is Confusion a State of Mind". In. H. te Molder and J. Potter (eds.). Conversation and Cognition. pp.161-83.
- Hayashi, Makoto (2005) "Referential problems and turn construction: An exploration of an intersection between grammar and interaction", Text - Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse, 25(4), pp.437-468.
- MacWhinney, Brian (2007) "The TalkBank Project" J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds.), Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Potter, Jonathan and Edwards, Derek (2003) "Rethinking Cognition: On Coulter on Discourse and Mind". Human Studies 26(2), pp.165-181.
- Potter, Jonathan (2006) "Cognition and Conversation". Discourse Studies 8(1), pp.131-40.
- Ryle, Gilbert (1949) Concept of Mind, Hutchinson's University Library (= 坂本百大 [他] [訳] (1987) 『心の概念』 みすず書房)

- Sacks, Harvey and Schegloff, Emanuel A. (1979) "Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction". *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, pp.15-21.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence Organization in Interaction*, Cambridge University Press
- Smith, Sara W., Noda, Hiromi Pat, Andrews, Steven and Jucker, Andreas H. (2005) "Setting the stage: How speakers prepare listeners for the introduction of referents in dialogues and monologues", *Journal of Pragmatics*, 37(11 SPEC. ISS.), pp.1865-1895.
- Wittgenstein, Ludwig(1953=2003) *Philosophische Untersuchungen : Kritisch-genetischen Edition*, von Joachim Schulte (eds.) Suhrkamp Verlag (=2013, 丘沢静也 [訳] 『哲学探究』岩波書店)
- 串田秀也 (2008) 「指示者が開始する認識探索 — 認識と進行性のやりくり —」 *社会言語科学*, 10 (2), pp.96-108.
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017) 『会話分析入門』勁草書房
- 須賀あゆみ (2018) 『相互行為における指示表現』ひつじ書房
- 早野薫 (2018) 「認識的テリトリー—知識・経験の区分と会話の組織」平本毅 [他] [編] 『会話分析の広がり』ひつじ書房, pp.193-224.

## 付記

本稿の文字起こし資料の転記記号は以下の通り。

.	発話末が下降	.hhh	吸気	¥ 文字 ¥	笑いを含んだ声色
,	発話末が継続	hhh	呼気	文 (h) 字	笑いながらの発話
文字 _	発話末が平板	文字 ?	発話末の上昇	> 文字 <	話速が早いこと
↑ 文字	音の急激な上昇	文字 〴	発話末の上下動	< 文字 >	話速が遅いこと
↓ 文字	音の急激な下降	文字 !	勢いのよい発話末	文 -	途中での音の途切れ
文字 :	引き伸ばし	° 文字 °	声が小さいこと	文字	話声が大いこと
[ 文字	2行で用い、重複	文字	声が大いこと	字 = 字	途切れていない発話
(0.0)	間隔をあらわす	「文字」	引用をあらわす	→	分析の焦点

千々岩 宏晃 (チダイワヒロアキ)

(大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程)

## A Conversational Analysis on the Mental Predicate “Oboeteru? (Do You Remember?)” in Japanese Conversation

CHIJIWA Hiroaki

This study argues that when people ask a question using a *Mental Predicate*, especially in the phrase “[Name] + (tte) oboeteru? (Do you remember [Name]?)”, they are not asking about the listener’s mental state; however, Mental Predicates serve as social resources, which do two types of interactional works.

In this study, two works of [Name]+(tte)oboeteru? are described through Conversational Analysis, by giving actual excerpts and by avoiding cognitive/mental descriptions.

The first Type I is used to request confirmation when introducing a new topic, which is considered surprising-worthy news, to the floor. In this type, the speaker has news-worthy information about a person, and expect the listener to have enough background knowledge about that person so that he can show his surprise to this information.

Type II is used to solve troubles of understanding by providing common referential person. Furthermore, it helps understanding critical elements regarding the topic. When Type II is used, the speaker expects the listener to have certain stand of information about the referred person.

This study suggests that by the usage of mental predicates, especially the predicates associated with memory, can be described as actions without using cognitivism-associated words.